

1. 年間目標について

高齢化や要介護度の重度化に伴い、必要とされる医療行為の充実を図り、終末期においても施設生活が安心して送れるよう、他職種間との連携・協働体制を深めてきた。

また、職員の健康管理にも留意し、定期健診は基より、個別の相談などにも対応できるよう専門知識の向上と時節に合った管理指導に努めるなど、概ね目標は達成できた。

2. 業務計画について

1) ご利用者及び職員の健康管理

<p>健康管理について (入居者)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 健康診断1回目 平成28年7月19日 平均年齢 89.9 歳 男性平均年齢 83.8 歳 女性平均年齢 90.9 歳。 36 名受診 (検診率 100%) 内、有所見者 35 名。 ➢ 健康診断2回目 平成29年2月10日 平均年齢 90.3 歳 男性平均年齢 84 歳 女性平均年齢 91.4 歳。 33 名受診 (1 名入院加療中) 内、有所見者数 32 名 ➢ 要精密検査を指摘されるような検査結果は3ケースあった。後日、主治医の診察時に再検査施行し内服薬開始となる。
<p>職員の体調管理について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 介護職員の平均年齢も高く、柔軟性と筋力の低下が目立ち、体調不良を抱える職員が目立っている。 ➢ 村外通勤を余儀なくされていること、かかりつけ医が固定しにくいことなどがストレスの要因になっている。 ➢ 腰痛対策については、予防法と介護技術の修得及び、福祉用具の購入 (マッスルスーツの) 腰部にかかる負担軽減に努めた。
<p>健康診断について (職員)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 検診率100% (年2回) 施設外での健診を受けた職員については結果の写しを医務室管理とした。 ➢ 職員の3割は何らかの慢性疾患があり内服薬の処方を受けている。 ➢ 腰痛検査 (年2回) については、“総合的に心配なしと判断”という結果が殆どであった。
<p>健康教育について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 職員会議定例会に於いて、時節に合った内容での勉強会を実施した。自身の体調管理については個別に相談を受けるなど、健康に関するの体制に努めてきた。 ➢ 『昼食後のストレッチ運動』については、身体の柔軟性とリラックス効果だけでなく、職員間のコミュニケーションをも図ることができた。良好な副産物をももたらす結果となり、次年度も継続し、その輪を拡げていきたい。
<p>受診について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 救急車搬送は0件、臨時 (歯科含む) 受診と定期通院の割合は半々であった。 ➢ 重度の認知症があり、転倒による大腿部骨折のために入院、手術を施されるという事例があった。 ➢ 入居者2名が白内障の手術を行い、その前後の定期通院などにも付き添った。視力の回復は本人にとって、生活の質はもちろん、ストレスの軽減にも大いに役立てたといえる。 ➢ 介護と看護間の連携と情報を共有することで、比較的速やかな対応ができた。(手遅れという状態は避けられた) ➢ 医療知識の周知・理解を図ることで二次的疾患や事故の予防ができた。 ➢ 重症度の高いご利用者についても主治医の指示の下、家族への連絡を密にするなど信頼関係を築くことができた。

2) 感染症対策

感染症対策委員会について	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 医務室が中心となり、時節にあった感染症についての情報を周知し、感染症予防・蔓延に努めた。 ➤ ノロウイルスへの対策・対応としての勉強会を開催
インフルエンザについて	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 入居者・職員にワクチンを接種。 ➤ 入居者0名、職員1名がインフルエンザ罹患者となったが、拡大することなく終息した。

3) 褥瘡対策

皮膚トラブルの予防	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 看護サイドでは、早期発見の重要性を周知することで重篤な褥瘡や皮膚の炎症を防ぐことにつながった。 ➤ 皮膚トラブルがもたらす2次的疾患の特性について知識を広めることができた。 ➤ 皮膚の状態を健やかにするため、セラミド入り乳液である『キュレル』及び皮膚の状態に合わせてワセリンまたはアズノール軟膏を個別購入し対応した。 ➤ 栄養の大事さ、経口摂取がもたらす効果については適宜ケア会議などで話し合い、関心を深めていった。 ➤ 蜂窩織炎を発症したケースが1名。介護側との情報共有が何より大切であることを改めて確認した。 ➤ 看護師間で検討し、保護剤や被覆材の選択については互いの情報を共有するにとどまった。次年度は開催される勉強会などに積極的に取り組んでいきたい。
-----------	--

4) 終末ケア

看取りについて	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 「慣れ親しんだホームで最期を」と希望する入居者や家族が多く、7名の方が施設自分の居室で永眠され、病院に移ってから亡くなられた方は1名であった。 ➤ 苦痛の緩和に努める事に重点を置き、悔いが残らないように配慮することで信頼関係を継続できた。 ➤ 終末期を考慮し、家族はもちろん、厨房・介護・看護の全スタッフで関わることができた。 ➤ かかりつけ医である医師には、定期診療に加え、深夜早朝にもかかわらず対応していただき、最期の確認と家族への説明をして頂けたことがより信頼関係を深めるものとなった。
---------	---

【入院状況】

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
大町病院	0	1	1	1	1	0	2	2	1	0	1	1	11
延日数	0	1	25	6	25	0	11	40	28	0	5	5	146
あづま脳神経						1	1						2
延日数						12	3						15
実人数 計	0	1	1	1	1	1	3	2	1	0	1	1	13
延日数 計	0	1	25	6	25	12	14	40	28	0	5	5	161

【通院状況】

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
大町病院	2	1	2	4	1				1		1	1	13
わたり病院											1		1
あづま脳神経						1							1
マルイ眼科		3	1	6	3			1	7	2	1	2	26
実数 計	2	4	3	10	4	1		1	8	2	3	3	41